

白と黒の革命

松本清張





の革命 と 清

文藝春秋

白と黒の革命

一九七九年十二月二十日 第一刷
一九八〇年九月十日 第五刷

著者 松本清張

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

郵便番号一〇二

電話東京(03)二六五局一二二一

凸版印刷 凸版製本

定価 一一〇〇円

©Seicho Matsumoto 1979
万一落丁・乱丁の場合は
お取替いたします。

Printed in Japan

目次

第一章 茶のみ話から

5

第二章 彷徨

71

第三章 テヘランで

129

第四章 僧衣の革命

202

第五章 中世の暗黒

248

第六章 カスピ海の町

289

第七章 石油十字軍

331

裴頓
伊藤憲治

白と黒の革命



第一章 茶のみ話から

1

重要な話が——その端緒になるものが、何でもないときに相手の口から出ることがある。

その場の雰囲気から先方は気をゆるし、一時的に慎重さを忘れる。とくに当面の用件で気詰りな話が終ったあとは、たがいがほっとなるものだが、その弛緩した気分誘われて、つい、口が軽くなりがちである。日常よく経験するところだが、この場合でも先方は、紅茶を飲み、小皿の菓子を割りながらの雑談にちよつと活気をつけるつもりだったのだらう。聞き手に世間話的な興味はあっても、話題に利害関係を持たないとみて話すほうは気をゆるしたのである。

今年の四月初め、梅が見頃をすぎた一日の午後、私の知り合いである村山次郎が、ニューヨークにいるベルシア絨毯じゅうたんの商人をつれてきた。エドモンド・ハムザビというアメリカ在住のユダヤ系イラン人である。色は浅黒いが、頭は半分以上白髪で、瘠やせぎすの上品な紳士だった。ものの言いかたも静かで、どこか知的だった。

私は目下仕事の上で、中世イランのサファヴィー朝の中でも英主といわれるシャー・アッバース(在位一五八八一六二九)の事蹟を調べていて、それに関連して絨毯のことを知りたく思っていた。これまで本で得た知識だと、イスファハンを首都としたイスラム・シール派国家のアッバース王は、そこに建設した壮麗な宮殿やモスクの内部を飾るために画家・織り師を集めて美術的意匠による絨毯を創造させ、これを保護した。王の命令で、それまでの遊牧民の素朴な文様からモスクの天井のタイル壁画と同じ模様を中心に華麗に織りあげたが、その花卉文様には「シャー・アッバースの花」とよばれるパターンがあるくらいだという。

エドモンド・ハムザビは過去二十年くらいニューヨークに住んでいる。カーペット販売を手びろく営んでいるということで、部厚いカラー写真入りの目録を見せてイスファハン絨毯の講釈をした。村山次郎は大手総合商社富士産業の海外支店長をながくつとめた男だが、アメリカでハムザビと知り合ったといい、かねて私が洩らしていた希望に沿って目下東京に滞在中のそのイラン人を同伴し、通訳もしてくれたのである。

ハムザビは長い商売だけにさすがペルシア絨毯に詳しく、その由来と、イスファハン、タブリーズ、コム、ナイン、カシャーニンなど各産地の特色——色彩と文様の特徴から織り糸の染色、こみいった織り方にいたる技術面にまでふれた。彼の風采は商人らしくみえず、事実、その身振り入りの説明は美術家のようなだった。指は揃って長く、繊細であった。

雑談に入ったのはそのあとである。話題はどうしても最近のイランのイスラム革命になる。むろんそれを持ち出したのは私のほうからで、訊いてみたかったのは反国王運動の原因と背景である。それも世間話として気楽な質問だった。

そんなわけで彼の答えに私はかくべつ目新しさを期待したのではなかった。新聞や雑誌で言わ

れているように、シャー・パーレビの近代化政策の急激な遂行とイラン国民の現実生活との乖離（かいり）と衝突に国王倒壊の原因があった、とやはり説明されるものと思っていた。さらには石油の収入によるシャー一家と王族など一部特権階級の腐敗と国民所得の貧困、軍事費が歳出の四〇パーセントを超えるという法外な予算による国民経済への圧迫、莫大な石油収入が国民になんら還元されるところのない不公平、それら民衆の不満が爆発して過激なデモとなり政府側の民衆統撃という異常事態が思ってもみなかった革命に発展した、と話されるものと思っていた。

ところが、おだやかなベルシア絨毯商人の茶の話は、こちらが予想していた常識的な答えとはまるきり違っていた。

「言われていることは皮相な観察です。真相はそうじゃありませんね」

ハムザビは細長い顔にうっすらと笑いを泛（うか）べていった。

「はあ。どういうことですか？」

「わたしは話しても、すぐには信じられないかも知りません」

相手はジュウリッシュ・イラニアンである。アメリカに二十年も住んでいるが、本国の様子はかえって在外同胞のほうが客観的につかんでいると思われる。他の例からみてもそうである。

「いや、わたしは新聞雑誌などによるとおりいっぺんの知識しか持っていないのですよ。ですから、なにを聞いても信じこむほうです」

ハムザビはちょっと躊躇（ためら）い、私の顔にその落ちくぼんだ眼の光を何秒間か当てていたが、こいつは国際感覚もなく、イランには世間なみ以上の興味もなく、何を言っても無害無毒の人間と考えたらしく、話しだす前に紅茶で舌をちょっと潤した。

「こんどのイラン革命は、石油値上げ路線に一方的に突走るシャー・パーレビの傲慢にアメリカ

のメジャーが懲罰を与えたことから起ったのです。革命のそもそもの原因は、そこにあるのです」

村山の通訳によってまったく予想外の内容がハムザビの口から出た。二十分にわたったその話は、これまでマスコミに報じられているイラン革命の「分析」とはまるきり違っていた。はじめ、私は、この男は鬼面人をおどろかす思いつきを言ってこの場の話を面白くさせようとしたのかと思つた。

「……わたしもはじめて聞く話です」

通訳したあと、村山自身が茫然とした表情で私に言ったものである。ついこの間まで大手商社の海外支店長として国際情勢に精通した男が呆れているのだった。当のハムザビは唇の上に消えかかるような曖昧な微笑をつづけているので、よけいにいま言った話が本気なのかどうかわからなかった。話そのものがとほうもなく規模が大きいのである。

イラン商人と村山の乗った車の音が家の前から消え去ったあと、彼の話がそれほど私の心に残っていたわけではなかった。が、風呂に入っているうちにその奇抜な話がしだいに胸に蘇ってきた。突飛すぎる話が湯の底から泡のように浮び上ってきたといえる。

あれは彼の法螺だったのだろうか。

そう考えるようになったのは、そのナンセンスともみえる話に捨てがたい芯こゝろのようなものがあると私に感じられてきたからだ。他の「解説」にはない説得力が含まれている。そう聞かされると、荒唐無稽の話のようだが、なるほどそういう線もないではない。盲点を衝かれたときによく感じることで、その説明によって何かはじめて截然と納得できるといったものがあつた。

いくらイラン通でもそれを日本人から聞いたのだったら、私には何も心に残らなかつたらう。

話し手がユダヤ系イラン人であること、本国には商用で年二回ぐらい帰っていて当然に外国人ではわからぬ情報を耳にしているであろうこと、そのうえでアメリカの居処から、やはり在米イラン人仲間と情報を交換して、客観的に精密な分析を加えているであろうことなどが私の気持ちに強くなった。そうして彼は日本人の家で、ほんとうはしゃべってはいけないことなのに、お茶の時間に気をゆるしてうかつにそれを洩らしてしまったという推測が、ますます真実味をもっているように私には思われた。

それと、彼の語った内容が、いまのところどの新聞にも雑誌にも一行も出ていないことが、私に魅力であった。だいぶん前だがテヘラン支店勤務も経験し、現在はその商社の顧問となっている村山が、ハムザビの話を通訳して茫乎としていたのである。

風呂を出た私は、ちょっと昂奮して書棚をかきまわした。今年のはじめに発行された海外資料の本が送られてきていたはずである。たしかそれにごく最近のイラン情勢が出ていたのを思い出した。

ようやくそれを見つけた。

《——シャー・パーレビのいわゆる「白い革命」による急激な経済面開発の歪みは、経済面だけでなく、社会・政治面にもあらわれた。世襲君主制政治は、経済開発の目的を王制政治の維持強化に置く。これが一般国民を近代化路線そのものへ反撥させた。

シャー（シャーはペルシア語で「国王」を意味する）ならびに王族が国家収益を私腹し、スイス銀行その他海外銀行に預金しているのも王制維持の一環であり、国民に不信をもたれる理由である。モノ不足や物価の上昇、停電などが国民の不満をつのらせ、反政府暴動や工場労働者のストライキが多発している。

一九七七年から反政府運動が高まりを見せている。当初は知識人グループの間にひろがっていたが、一九七八年に入ると政治色の強い反政府暴動に発展、イラン全土にひろがった。暴動は一部の反政府勢力（共產主義者や宗教論者）の煽動によるものと伝えられているが、これが一般大衆をもまきこんだ大規模な反政府暴動に発展している。ストライキのスローガンは賃金の引上げ要求が多い。物価上昇（インフレ・年間五〇％を超す）が激しいため一般国民の生活苦は改善されず、近年の賃金上昇は三〇パーセントを超すにもかかわらず、不満が高まっている。

イランでは一九七三年度にはじまる第五次経済開発計画の実践をすすめてきたが、成果は政府が予期したとおりにはない。第六次計画はまだ五里霧中の状態にある。

石油部門が予想外の低成長で、第五次計画の失敗原因は、石油部門の不振にあったといえる。国王はあらゆる方法で国民のナショナリズム高揚につとめている。アケメネス朝の創始者キユロス大王（在位五五九―五二九B・C）の戴冠の年にさかのぼって、一九七六年には二千五百年の式典を催した。しかしイラン人は西欧志向の強い国民である。

『インシャッラー』（アッラーの神の思召し）は、しばしば責任のがれに利用される。果して宿命論は、イスラム教の教えなのか。インシャッラーは砂漠という苛酷な自然の中で培われた宗教以前のものである。

イランでは筋肉労働の職業が最下層を占めている。工場労働は輸入労働者にまかせている。筋肉労働は、農業を含めて汚いもの、下賤なものとみなされた。軽蔑する工場労働でも、車が欲しいし、テレビが欲しい、しかし、他に良い仕事がないとなると、これをせざるを得ない。かれらも物質的欲望には届するのである。しかし、工場労働をきらう者は、サービス業におもむく（中東経済研究所「中東に於ける日系合弁企業」より）

この一九七八年のはじめに書かれた報告を読んでも、「白色革命」といわれる国王の急激な近代化路線が貧困な国民の反撥を招き、反体制暴動となり王制を崩壊させたという従来の見方と変りはなかった。

それにしても国王とその政府とがまだ健在な七八年のはじめに「シャーならばに王族が国家収益を私腹し、スイス銀行その他海外銀行に預金している」とは、思い切ったことをこの経済関係の刊行物は書いたものである。

エドモンド・ハムザビの言葉は、私の脳裏にこびりついてはなれなかった。もちろん私は国際情勢に疎いし、イランの情勢にも暗い。私のイラン革命の知識といったら、新聞の外電をとびとびに読んだ程度の貧弱さであった。だが、あとで考えると、これがかえってよかったのかもしれない。あまり予備知識がありすぎると、ハムザビの奇矯な話をその場の座興として一笑に付したであろうから。

2

私はハムザビが帰国するまでもう一度彼に会いたいと考えた。翌朝村山次郎に電話すると、そんなにあの話にあなたが興味をもつとは知らなかったと彼は電話口で笑った。

「たしかに話としてはおもしろい。しかし真実性となるとたぶんに怪しいですな。もしそうだとしてもこれはたしかめようがないですからね。なにしろ話がよほど大風呂敷です」

「もう一度そのへんをよく聞いてみたいんです。ところで、あなたはハムザビさんとはどこで知り合ったのですか？」

「五年前にボストンで会いました。ある外国商社マンの紹介だったが、いきなりカーベット取引

の話を持ち出されました。富士産業はそういうのは扱わないので、話はそれきりになったが、三日前にふいに彼から電話がかかってきて、奥さん同伴でいま東京に来ていてというのです。で、ベルシア絨毯のことが知りたいというあなたの話を思い出して、お宅に連れて行ったのですが、ただ、それだけの関係でしてね。それ以上にはエドモンド・ハムザビの人物を知りません。ニューヨークの立派な商店街で二十年間もカーベット専門の店舗をかまえているという商人だから、いい加減な男ではないと信じますか？

「彼は、いつアメリカに帰るのですか？」

「明後日の夕方だと言っていました」

私にとって都合の悪いことに、今日はほかの用事で塞がっているし、明日は前からの約束で大阪へ行く必要があった。しかし日帰りすることにきめた。

「ハムザビさんにわたしはまた会いたいです。昨日の話が妙に忘れられないのですよ。で、明後日、出発前に時間を割いてもらって、もう一度聞き直したいのですがね」

私は村山に同行をたのんだ。

「ぼくはかまいません。それに、あの話はぼくにも興味がありすぎるくらいですから行きましよう。いま、先方の都合を聞いてみましょう」

折返しての電話で、ハムザビ夫妻は今朝から日光に行っていて明日の晩に帰る予定だというホテルの返事を伝えた。かまわないから、明後日の午前十一時ごろにいきなりホテルへ行こうと村山は言った。

もちろん私は石油のことにも、メジャーといわれる世界の石油資本のことにも素人である。それで街へ出たついでに本屋でイラン関係の本を買い、翌日大阪へ行ってもそこで本を買った。急

なことだし、十分ではなかったが、基礎知識程度の概説書は求められた。私は、家でも、大阪のホテルでも、帰りの新幹線の中でもそれを読んだ。

約束の日の午前十一時、私が赤坂のホテルへ行くと、村山はさきに來ていて、フロントのところに立っていた。

「ハムザビ夫妻は二時間前にチェック・アウトをしています。けど、荷物はポーターに保管をたのんで置いているから、たぶん買いいものにも出かけたのでしょうか。彼の乗るニューヨーク行は成田発六時ということでしたから、まだ時間は充分にあります」

ハムザビが戻ってくるまでにわれわれもここで昼食をとることにし、フロントの係には彼あてのメッセージを頼み、地下の軽食堂へ降りた。

「ぼくもね、一昨日のハムザビの話をつばものに聞いていたが、ちょっと思いあたるところがないでもないのです」

せまい食卓に對い合ってから村山はまわりに聞えぬように低い声で言った。時間が時間なので食堂はかなり混んでいた。

「それは何ですか」

「シャー・パレビはいまモロッコに滞在しているが、アメリカと結びつきの強い彼が、どうしてアメリカに亡命先を求めないで、そんなところへ行ったかということです。しかも、シャーは、新聞報道だと、出国にあたって、アメリカに裏切られた、と言っていますね」

「どういう意味ですか？」

「わかりません。アメリカが彼に冷たかったというのでしょうか。しかし、シャーは一九五三年に一時は国外へ脱出したがアメリカの後援による軍部のクーデターでふたたび戻ってきた経験か

ら、こんども、彼は心ひそかに帰国を期待しているでしょうね」

私の読んだ本にはこういう記述があった。

『——第二次大戦直後のイラン国内は、物資の欠乏、インフレなどにより経済的には疲弊し、したがって政情は不安定であった。先代皇帝レザー・シャー（一九四一年独ソ戦の勃発後イランは中立を宣言したが、英ソによる国内在住ドイツ人追放の要求に応じなかったため南北から英ソ両軍の侵入をうけ、レザー・シャーは抗戦の責を負い退位した。彼はインド洋上の孤島モリシヤスに流され、一九四四年南アのヨハネスブルグに没した）の独裁的執政にたいし、国民の間に不満と反撥が高まり、それに乗じて共産党の勢力が伸長するとともに、一方においては急進的な民族主義者も擡頭した。彼らは、国民経済再建のために石油の国有化を主張し、モサデク首相は一九五一年石油国有化を宣言した。』

しかし、これにたいして西欧諸国からの圧力は強くなり、イランはいっそうの経済困難に追い込まれた。そして一九五三年皇帝を擁立する親西欧勢力のクーデターがおこり、皇帝が一時国外に脱出し難を避けるような事件もおきたが、軍部の力によってモサデク内閣は倒され、皇帝は帰還した（『日本国際問題研究所発行・外務省中近東アフリカ局監修『世界各国便覧叢書・イラン帝国』）

「一九五三年の軍部のクーデターというのも、じつはCIA（米中央情報局）の謀略によるものだったことは、すでに事実として公表されています」

村山はトーストをかじりながら言った。

「一九〇一年いらい半世紀にわたった英国のイラン石油支配は一九五一年のモサデク首相の石油産業国有化宣言で終止符がうたれたのですが、このとき国営イラン石油公社（National Iranian Oil Company）略称NIOCが設立され、同社がイランの石油事業を接収しました。そのためアング